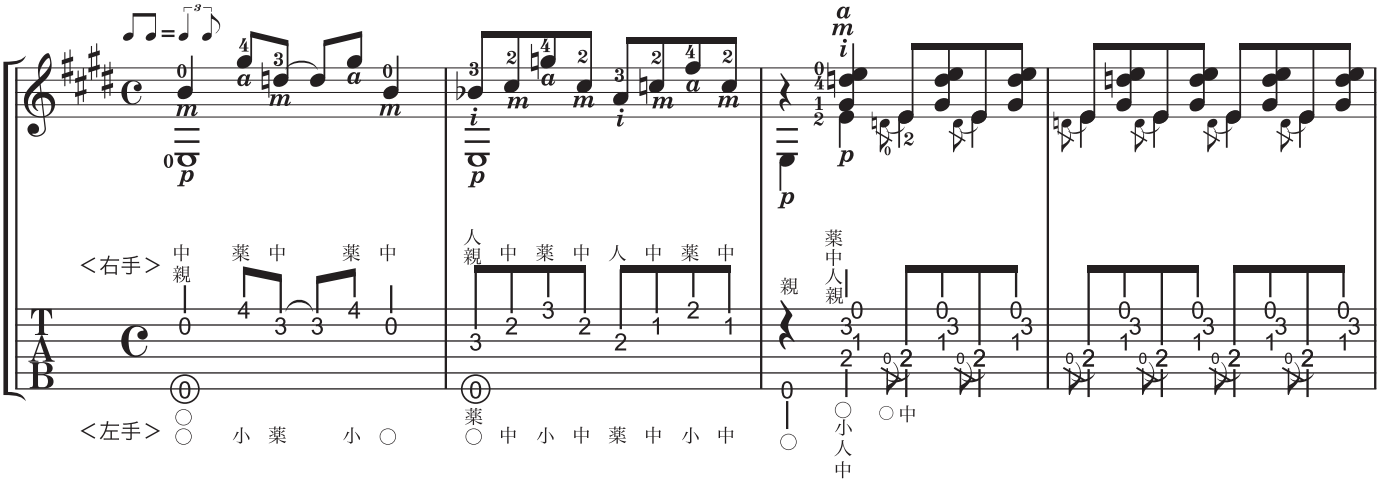
日本固有のギタータブ譜



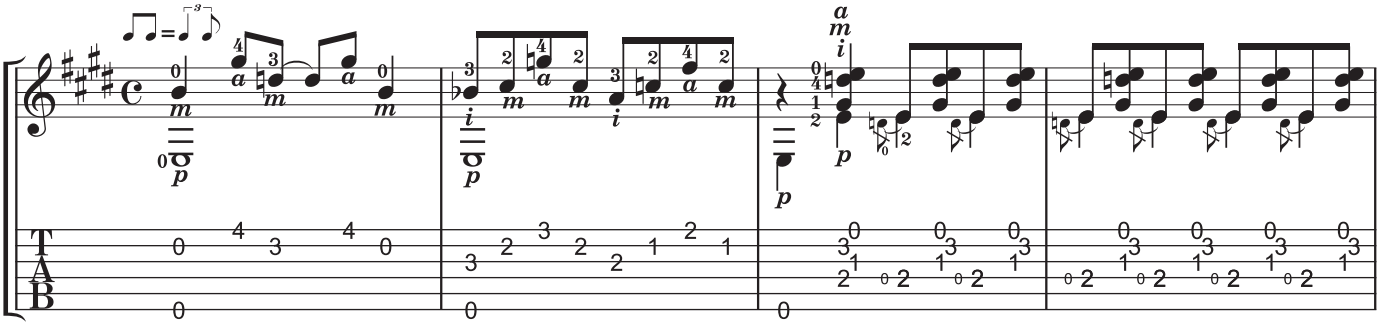
今回の見本は典型的なブルースのギターソロです。これはいわゆるフィンガースタイルで、ピックを使わずに、クラシックギターと同じような右手の奏法で演奏するための譜面です。この類いの出版楽譜も今までに随分と制作してきましたが、クライアントそれぞれの細かい好みの違いはあるものの、大筋ではこの見本のようなものになります。

上段に普通の五線譜を置き、下にタブと呼ばれる奏法マニュアルのような図面を載せるというものですが、６本の線がギターのそれぞれの弦を表し、数字がフレットを示しています。ゼロは指を使わないこと、つまり開放弦を意味していますが、この直接的な方法は現代の発明ではなく、遠くバロック時代のリュートやビウエラやギターの記譜法に倣ったものに過ぎません。リュートにおいては文字、ビウエラやギターでは数字といった違いはありますが、原理的には全く同じものです。

ロマン期以後のクラシックギターの楽譜には多くの指示がありますが、一つの五線にそれらを混在させる為に色々な工夫が為されてきました。左手の指示には弦楽器一般と同じく数字を用いて、右手にはそれとの混同を避ける為に文字を当てるのもその一つです。例えば p とか m はスペイン語名称の頭文字で、これは親指と中指を意味します。また、本見本にはありませんが、弦楽器特有の弦指定には丸囲みの数字が使われます。ここまで書けば十分かとも思うのですが、入門者の読譜の一助としてのタブ譜を添えるのが昨今の一般的な傾向で、それは古典の楽譜にまで出現してきています。

確かにタブ譜においては弦指定は自明で、押弦箇所も直接的に示せます。しかし指の使い方は表せません。ピックスタイルならダウンとアップにバイオリン譜の運弓記号が使えますが、それでも左手の指示となると数字を使うわけにはいきません。タブの数字と紛らわしくなるからです。

本譜の姿はクラシックギタリストが仰天するものに違いありません。漢字を導入するという奇手があったのです。フィンガースタイルでは上段に右手、下段に左手という仕分けが標準的です。漢字の本質として、「人親」とか「中人」と並ぶと「意味」を感じてしまいますが、これも慣れの問題でしょうか。



良く考えてみると、タブ譜にそこまでの情報を付けるならば五線譜はもはや不要になり、また五線譜に奏法指示を書き込むなら、補助図形としてのタブ譜にはフレット指示の数字以外の一切が不要なはずです。アメリカの出版物で上例のような楽譜様式を見たことがあります。

五線譜とタブ譜それぞれに独立した完結性を持たせるという様式はおそらく我が国独自のものと言えるでしょう。確かに、これなら五線派とタブ派の双方の需要に応えられます。必要ページ数が倍以上になるとしても、その方が採算性が良い、つまり「売れる」ということなのでしょう。商業出版社が「趣味」や「主義」で楽譜を出すはずもありません。

ところで、毎度賞賛するように Finale の柔軟性は大したもので、符尾連桁付き、または数字のみタブ譜のいずれでも、速く簡単に設定できます。Ver.2003 以後は作成法も簡単になりました。ただし、Win と Mac の互換性となると、最新の Ver.2009 に至ってもタブ譜の付点や発想記号アイテムの表示位置に狂いが生じるなど、点検と手入れが必要なことには変わりありません。

2009 年 7 月　梅本雅弘